

堀直虎没後 150 年記念事業

歴史文化講演会Ⅱ 『織豊大名堀氏の勇躍』講演録

- 日時 平成 29 年 11 月 11 日（土） 午後 2 時～午後 4 時
- 会場 シルキーホール（3 階 第 1 ホール）
- 講師 長野県立歴史館 専門主事（史学博士） 村石正行さん
- 共催 生涯学習推進センター「市民総合大学」公開必修講座
- 参加者 128 人

みなさん改めまして、こんにちは。今、立派な後輩に紹介して頂きました。私が高校を卒業してどれくらいになるかというところと 30 年くらい経つのですが、このように後輩に紹介して頂けるのは本当にうれしいことです。また、今日の会はボランティアの方が中心で準備をされたり運営して頂いたり、というようなことをお伺いしまして、私も今県立歴史博物館の方でボランティアの皆さん方と一緒に博物館を作っていきたいと思います。動いていますけれど、こちらの会はずいぶん進んでいてすごく感心しているところです。そんな須坂市の皆さんの熱い思いとともに直虎没後 150 年ということで、浅田次郎さんや江宮先生が来られたこの 1 年は須坂市にとって新たな歴史が紐解かれたのではないのでしょうか。須坂市出身の私も非常にうれしく思っております。

そしてそういうお話の中で、みなさん方はよくご存じのことと思いますが、明治時代になりまして須坂藩の藩主の遺徳を忍びまして奥田神社が立てられました。須坂市民でしたら奥田神社を知らない人はいないと思いますが、「あれ、堀氏だから堀神社ではないの？」と思いませんか？私はそう思ったわけです。堀神社ではなくてあえて奥田神社、奥田さんの名前を付けている神社を作っている、というところが今日の話の前振りとして聞いていただきたいわけです。

関連するエピソードをひとつ紹介します。私の祖父が、もう亡くなっていないのですが、田中角栄、当時の総理大臣が須坂の町に来まして、奥田神社の前で須坂市民に向かって大演説をしたことがあると昔よく言っていました。その時に田中角栄さんの演説は「須坂市民の皆さん。私と須坂市民の皆さんは親せき関係と同様である。」といった内容だったそうです。田中角栄さんの目白台の家は、須坂藩屋敷跡に建てたものだからだと言う理由です。しかし、須坂市民の皆さんはだれもそのことを知らなかったんですね。「ええっ！」という話です。当時、総理大臣が来るということで 5,000 人ほどの人が集まったと伝わっています。田中角栄さん自身は新潟県西山の出身で、須坂の堀家と兄弟関係にあった椎谷藩の領民であります。そういうことがあって親近感があったようです。ところが、実際のところ調べてみると田中角栄先生の記憶違いでありました。江戸時代の古地図を見ても、須坂藩と目白台の関係は出てこない。残念だったんですが、ただ、田中総理大臣の意識の中ではご自身と堀家・奥田とが繋がっていた。昭和 44 年の出来事です。私たち須坂市民にとってみると面白くて、心温まるエピソードのひとつではないかなと思うわけです。

奥田さんというとな何を思い出さかというとな、中世という時代になります。お手元の資料はおうちに持ち帰って、今日の講座の復習にご利用ください。今日はプロジェクターの画面を中心にお話を聞いていただければと思います。今年には色々なところで「明治維新 150 年」のイベントを須坂市の直虎公の没後 150 年祭のように行っている。150 年前、江戸時代が終わり、どの藩でも藩がなくなって明治時代に突入していたわけですね。日本全国、どの藩もなくなった。今年には、大政奉還から 150 年になります。また、来年は明治 150 年周年です。

江戸時代における大名の数について見ていきましょう。江戸時代の初期は大名の数は約 185 です。その後、だんだん増えていく傾向にあります。江戸時代中頃、赤穂浪士の時代ですね、元禄 4 年には 243 藩です。宝暦年間には江戸時代後期に 254、元禄時代以降からは藩の数は増えてないけれど江戸の終わりの文政年間には 264、江戸幕府が始まったころに比べるとずいぶん増えていくことがわかります。さらに細かく見ていきましょう。大名の格というのは最小の石高が 1 万石で、1 万石は藩になるかならないかの 1 つの境目でした。須坂藩は一番小さい 1 万石の藩というイメージがありますが、では全国でどれくらいの規模の藩がどれくらいあったかということを見ていきたいです。文政年間・江戸時代の終わりで 264 藩ありますが 10 万石は約 18% を占めています。たとえば、昨年の大河ドラマになった真田氏は 10 万石です。一番多いのが 1~2 万石の間で全体の 3 割、1 万石の小さな藩は須坂藩だけでなく 44 藩もあったということになります。私たちが思っているより小さい藩はずいぶん多いのです。これは、大名家が分家、たとえば兄弟関係のれん分けをして違う藩を作るということがあり、結果、江戸時代終わりには数が多くなりました。そんな中で須坂藩は江戸初期から終わりまでずっと続いた数少ない藩だということです。

いま一度、画面の表で確認していきます。

3 万石から 4 万石が 30 藩

2 万石から 3 万石が 42 藩

1 万石から 2 万石が 85 藩

この段階で 1 万石~2 万石の藩は、一番多い過半数を占めているということがわかります。そんな中での加賀 100 万石はとびぬけて別格で珍しい藩です。表の下の方、10 万石以下が一番多いのは一目瞭然です。

そんなことを頭の中に踏まえて、須坂藩堀家の発祥についてお話していきます。堀という名前は、『戦国時代の傑出した武将』と江戸時代いわれていた奥田直政が、自分の主君から堀姓を名乗ってよいといわれて堀姓になったわけですが、もともとは奥田という苗字をずっと使っていました。奥田家の系図とその主君に当たる斯波家の系図を見ていただきますと、奥田家を辿っていきますと、斯波（しば）氏の一族に繋がります。高校の歴史で勉強しますが、応仁の乱のときの当事者の一人が「斯波氏」です。室町幕府というのは将軍様がいます。昔アニメに「一休さん」というのがありました。新右衛門さんがいて、一休さんが将軍にとんちをかけて勝つというお話ですね。そこに出てくる将軍が足利義満です。

『管領』は室町幕府の将軍の下で補佐をする職で、現在の安倍総理大臣を将軍とするとその下で働く副総理・官房長官などの役割を果たしているのが管領です。管領は3つの家の出身者に限られ、斯波家・細川家・畠山家の家のものしか管領になれなかったのです。まさに選ばれた「家柄」でなければということでしょう。その嫡流はいろいろあるのですが。最盛期で尾張国・遠江国・若狭・越前・越中・元佐渡・信濃国の守護も1人で勤めていました。守護は今でいう県知事のような職です。斯波氏は多くの国の守護であり、室町幕府の管領を勤めている家でもありました。そういう家の出身が奥田です。斯波氏略系図を遡って見ていくと、義将（よしまさ）が出てきますが、この人が直系となります。この義将の弟が義種で、義種の子孫の中から『奥田』という一族が出てきています。この奥田というのはちゃんと地名があります。「奥田という地名がある」という話の前に、平安時代から戦国時代の姓について話しておきます。戦国時代の武士の名字っていうのは、源氏・平氏・藤原・橘（源平藤橘の四姓）の4つの姓が主流で、お隣同士みんな「藤原」で判りにくいという不便さがありました。遠い遠江国に住んでいる藤原さんを「遠藤さん」と呼ぶなど、通称名・地名で呼んで区別をしました。つまり、自分の住んでいる郷（村）の名前を取って名字としていくのが、中世・戦国時代の名字のつけ方です。尾張国の奥田という場所に住むようになったので、斯波氏だが『奥田』という苗字を名乗るようになった。これが須坂藩奥田家のまさに直系のルートとなります。今の愛知がふるさとである奥田家がどんな家柄なのか見ていきましょう。

斯波氏はいろいろな国の守護を1人でしていましたが、管領として将軍様の補佐をしなければいけないということで、斯波氏本人は京都にいました。そこで、代理の者を自分が治めている国に派遣していました。守護代理と呼ばれる一族を自分の代理人として地方に置いたのです。守護代理の例として、尾張国の守護代をしていた織田家があります。織田信長の織田ですが、ちなみに織田信長と同じ織田家でも分家も分家、本家ではありません。織田家の本家が尾張の国の守護代をしていたのです。有名な越前の守護代理の朝倉氏はのちに戦国大名になる。織田氏も同様に戦国大名となります。この戦国大名というのは、地域に根付いた守護代理がなったケースが多いのです。信濃国の場合は斯波氏が守護となったことはもうお話ししました。その守護代というのは二宮・島田・完草（ししぐさ）という一族が守護代となっています。その中で、奥田さんというのはどこから来たのか見ていきたいと思います。愛知県名古屋市の隣、稲沢市に「奥田」という地名が残っています。車で長野から名古屋に高速道路で向かって行きますと、一宮インターチェンジを降りてすぐの場所となります。奥田家の始まりは管領であった斯波義敏（よしとし）の孫が斯波氏分家の奥田家の養子となることからです。この人は後で出てくる奥田直政の父親です。愛知県稲沢市の奥田のすぐ近くには、斯波氏の守護所、いわゆる尾張国の県庁がありました。下津というお城で、奥田の地とは隣同士になります。しかも斯波氏と將軍家は非常に近い関係にあったので、近隣には將軍が深く関わった有名な妙興寺という將軍の祈願所があります。現在は一宮市に位置する妙興寺には、京都にいる將軍がわざわざお参りに来て

います。つまり、奥田家が将軍家と近い関係にあり、交流があったと考えられるのです。小字が出ている稲沢市と一宮市の地図を見ると、守護代である織田と奥田は非常に近い場所にいたことがわかる。また、妙興寺も近隣にあります。尾張の国の中心になる場所で尾張の国の守護代織田がいて、家臣である奥田がその周辺にいたということになります。地理的な関係を確認してみました。今現在は分譲住宅地となっていますが、地元の郷土史を勉強している人たちがずいぶん前、昭和44年に織田氏の下津城跡に石碑を建てています。

下津城に関係があるのが、6代将軍足利義則（よしのり）で、応仁の乱より20～30年前に亡くなっている将軍です。この頃になると幕府の力も弱まりかけていて、将軍になる人がいなくなってしまったことがあります。そんな時、出家してお坊さんになっていた義則が引っ張り出されて、前代未聞のくじ引きで将軍になったという方です。それがコンプレックスであったのか、恐怖政治をしたことで有名です。たとえば、側近と意見が合わないとすぐ殺してしまうので、戦国時代の織田信長と言われていました。この義則という将軍は今の妙興寺というところに盛んに寄付をしていて、手紙も残っています。妙興寺にお参りに来た際に泊まったのが下津城でした。こちらにも記録が残されています。

この妙興寺ですが、須坂にも関係があります。看板が須坂市高梨に立っていますが、関山慧玄（かんざんえげん）生誕地とあります（信濃国高井郡の国人領主高梨氏で高梨高家の子とされる。鎌倉時代末期から南北朝時代の臨済宗の僧）。妙心寺を開山した僧です。妙心寺派と言って一大門下となっていて、妙興寺は臨済宗の中でもとくに地方の大きなお寺の中で筆頭に挙げられるお寺です。妙興寺の古文書は膨大で国の重要文化財に指定されています。その妙興寺に将軍が寄付をする、ということは妙興寺が将軍のために祈禱しなさい、お参りしなさい、お経を読みなさい、その代り幕府が保護しますよ、ということです。そういった妙興寺と奥田家は関係が深いことは、史料を見ていくと見えてきます。【史料1】は両家の深い関係を裏付ける資料となっています。

下津城のすぐ近く崇願寺というお寺があります。このお寺は代々尾張の守護代理であった織田氏の菩提寺でした。画面資料ご覧ください。写真の後ろの方に織田家歴代の供養塔などがあります。信長の一族とは別の織田氏ですが、名古屋の私鉄名古屋鉄道には奥田駅という駅があります。この駅を降りて徒歩で10分ぐらいの地域には今でも「奥田」が頭につく地名が多く残っています。その中に「奥田堀畑町」という地名があり、奥田のお城がこの場所にあったのだろうと推定できます。現地に行って歩いてみると、須坂の町中に非常によく似て、狭くて細い道が複雑にあります。戦争中に空爆など受けずに焼けなかったことで、非常に古い地割が残っていることが裏付けとなります。路地が複雑に入り組んでいる中を歩いていくとそこに細い矢竹が茂っていました。矢竹というのは戦争中弓矢を作成するために館の周りに植えていたケースが多く、このような環境と裏付けにより、奥田氏がもともと住んでいた城があったと考えられます。今はきれいに整備されて看板なども立っていないのですが、地元では奥田城跡と言われていました。このように現地に行くと目に見えて奥田のルーツが辿れる、ということになります。

奥田家の始まり、祖というのは氏種からになります。資料にあるこの秀種は2代目になります。秀種というのが管領である斯波氏の直系の家から直接奥田家に養子に入ります。もともと奥田家は斯波氏の分家ですが、斯波氏直系の家から養子が入ったことで、血がさらに濃くなった、管領家とのつながりが強くなった、というわけです。守護代理になり力も持って前途洋々と思われた斯波家ですが、残念ながら応仁の乱が起こり、斯波氏は分裂して没落します。このまま力を持っていたとすれば奥田氏もそれ相当の活躍をしていたと思いますが。斯波一族は没落してしまった室町幕府の管領一族の典型的な例として大学の歴史概説の授業に出てきます。

秀種の頃、管領の斯波家の家臣で生きていくよりは、と考えて美濃に移住します。だんだん長野に近づいてきます。美濃の茜部というところにやはり没落した守護の土岐(とき)家の家臣となります。こちらも没落守護の代表なんですが。没落した斯波氏が没落した土岐氏の家臣となる、非常に残念な例です。この時に秀種は、美濃国の土豪堀利房の娘を奥さんにします。ここで、堀家と奥田家が親戚関係となります。その後、どうなったかという秀種の跡を継いだのが堀直純、堀直政のお父さんです。美濃国の土岐氏が斉藤氏によって追放されたため、土岐氏は没落します。そこで奥田家は主君を変え、直純は斉藤義龍の家臣となります。戦国大名の典型としてよく出てくる斉藤道三の息子です。道三は息子の義龍に殺されてしまうのですが。戦国時代は、まあ、めちゃくちゃな時代なわけです。直純はその義龍の家臣となりまして、非常に腕自慢の方だったようです。義龍と道三がはじめた長良川の戦いで相手方の武将・道家孫次郎を討ち取り、「悪七郎五郎」と称賛されます。当時の悪は悪人の悪という意味ではなく、馬鹿力を持っていてめちゃくちゃ強い、他に敵なしという意味で使われています。まもなく斉藤家は滅ぼされてしまうので、奥田家は織田信長の家臣となります。

奥田氏と織田氏の連名の古文書と現代語訳が【資料1】にあります。これは、織田と奥田が連名の宛先になっていて、妙興寺のお坊さんが二人宛てに書いている手紙です。これによると、妙興寺に税金を納めてねというような内容が書かれています。その地域の庶民からの税金を取りまとめてお寺に納めていたのが、守護代の織田と奥田氏であり、連名で妙興寺からの手紙を受け取っているということです。だから、織田氏とも非常にかかわりが深いということになります。税金を回収するというのはどちらかという内政実務ですね、奥田氏は戦いをするというよりも、事務屋さんであったということです。下の名前はわからないので誰かはわかりませんが、奥田一族が織田氏とともに尾張の国の財政面を担っていたことがわかります。

簡単に奥田家の発祥についてまとめておきます。奥田氏というのは管領であった斯波氏の一族であり、尾張国を拠点とした豪族でした。場所は愛知県稲沢市奥田という場所が発祥の地で、一宮インターからすぐのところ。室町幕府6代将軍足利義教(よしのり)は富士遊覧の際に尾張国守護代織田氏の守護所である下津城を訪れ、奥田家の近くまでやってきて、妙興寺に肖像画まで残しています。奥田氏は京都の斯波氏の配下として織田氏

と一緒に尾張の内政実務を担っていたのです。この一族がのちの須坂藩主となる奥田家の先祖の話です。

この奥田家が須坂藩の藩主になるためにやってくる話はまた後の話であって、須坂の奥田家の話の前に、堀氏、美濃国の土豪であった堀氏の話をしておかなければなりません。堀秀政という人が出てきます。本日の講演のタイトルが『織豊大名 堀氏の勇躍』となっていますが、「織豊」（しょくほう）という響きは聞きなれないことと思います。織豊大名の織とは文字通り織田信長の配下として大名にひき立てられた者の意味で、豊とは豊臣秀吉の配下で大名に引き立てられた者を指します。これをひっくるめて織豊大名と呼びます。元々堀氏は大名ではありませんでしたが、織田信長の下で目覚ましい活躍を遂げていきます。チラシにも記載がありますが、「名人久太郎（めいじんひさたろう）」と呼ばれる人物堀秀政が現れます。名人という名前のおり、すべての面において長けている、戦いもそうですし、内政実務もそうでした。色んなことにたけている上、人間的にも人望が厚いわけで、「名人久太郎」と呼ばれる所以です。そんなわけで堀秀政は、信長や秀吉にとっても愛されます。そしてその後、30万石の大大名になっていきます。

堀秀政は美濃の茜部（美濃国厚見郡庄上茜部）を根拠地とし、父堀秀重の時に信長に仕えています。有名なエピソードですが、秀政はわずか13歳で初陣をします。現代で言うところの中学1年生です。秀政は永禄6年に織田信長の配下となります。直臣団の宰領の地位を与えられています。お坊さんになっていた叔父である堀掃部太夫（僧毛坊）から「2人は親戚関係（従兄関係）なのだから仲良くするように。片方が活躍したらもう片方は活躍したものに仕えなさい、つまり血縁の濃い者同士で兄・弟として主従関係を作り上げて堀家を盛り上げなさい」と叔父の僧毛坊は秀政とその従兄である直政に諭したのです。結果として堀秀政が初陣で活躍したため、奥田直政が秀政の家臣となる形となりました。また、秀政というのはいわゆる筋骨隆々というタイプではなく細面で非常にかわいらしかったため、小姓に取り立てられました。小姓というのは将軍の日常のお世話をするという役割でした。小姓になり、出世していくというのは戦国時代によくあるパターンです。秀政は、信長の小姓としてめきめきと頭角を現していきました。そして、信長の古くからの家臣団を取りまとめる地位まで上り詰めたのです。

では具体的にどんな業務を行っていたのかというと、信長に代わって感状、戦（いくさ）で立てた手柄をほめて主君や上官が与える書きつけのことですが、通常側近が書くものでして、感状を発給したり、信長の命令を直接伝達したりしていました。奥田直政はそんな秀政の下で働いていました。系図を見て下さい、奥田直純の奥さんが秀政の父親である秀重と兄弟関係であり、秀政と直政はいとこ同士です。一向宗の僧になっていた叔父である堀掃部太夫の計らいで無二の契りを結び、主従関係を結ぶこととなります。いとこ同士で非常に血が濃い、そんな中で動いているわけです。直政は江戸時代の初期まで生きるのですが、その直政が堀家の中で実権を握る日が来まして、家督相続の問題が起これ内紛に繋がるわけですが。堀家を語る時、秀政と直政の関係が非常に重要となります。秀政の叔

父である毛坊は二人に「どちらか先に高名を挙げたならば、もう一方はその家臣となり、堀の家名を興することを第一と考えなさい」と諭したエピソードは江戸時代の書物に書かれている話なので、本当かどうかはわかりませんが、実際もそれに近いものだったのだらうと思います。堀秀政の自画像と伝えられる絵がこちらになります。結構年配に見えるのですが、実はまだ若い30代で亡くなります(37歳没)。こちらの写真は、美濃国・岐阜県岐阜市茜部本郷にある石碑で「上茜部城跡堀秀政誕生地」と刻まれ、周囲には花が植えられています。

どのようにとんとん拍子で出世していくかという、13歳で初陣、5000石をもらいます。これは異例中の異例ですね。須坂藩主が1万石ですから、5000石はその半分に値します。成人男性が一年間に食べる白米が約1石とされていますので、単純に5000人を扶持できるということで、5000人を扶持できる、家臣を雇うことができると考えられます。13歳であったということ、それまでは土豪であったということから考えても相当の出世であったと考えられます。場所は琵琶湖の近く、近江国に5000石の領地を貰っています。3年後には16歳で奉行となります。今でいうと高校生です。信長が最後の将軍・足利義昭を京都に呼び寄せます。この頃には室町幕府の力は衰えてきて、地域の大名に助けられての上洛です。ところが御所がなかったため、京都の日蓮宗の本圀寺を仮の御所にしようという話になりました。その時の奉行が堀秀政だったのです。秀政は天正5年、今の和歌山県の雑賀衆、鉄砲集団根来衆をおそうとき25歳で単独の部隊を与えられるなど、非常に活躍していきます。古い地図で安土城古図というのがありまして、この中に、織田信長の屋敷の隣に堀久太郎の屋敷があるのがわかります。拡大してみただくとわかります。

何年かはわかりませんが、日根野家にあてられた手紙が【資料2】です。大坂の天王寺で合戦をした時の日根野孫次郎、のちの諏訪藩の藩主になる人物宛てです。天王寺の合戦で稀にみる粉骨砕身の働き、傷が治ったら京都に早くいらっしゃいと、信長がおっしゃっています、という内容の手紙を秀政が飛脚となって急いで、直接この手紙を届け伝えます。信長が直接来いと言っているのです、日根野は怪我をしています。急いでいきます。行かなかったらどうなるかわかりませんので行くわけですね。どちらかという公的な文書なのですが、プライベートな内容で傷が治ったら早くいらっしゃいという、ねぎらいが込められています。

江戸時代の『常山奇談』という書物の中でも秀政について、その行政手腕を非常に高く評価しています。「名人太郎」、「名人久太郎」と呼ばれ、身分が下のものでも積極的に登用してうまくいくのだったらそうしようとする対応ぶりを評価している。そればかりか、天下人つまり、織田信長・豊臣秀吉の側近としてあつた方が良かった方が良いと指南し、決して落ち度がなくその指南はすべて成功した、と高く評価されている。だから信長や秀吉の政権下で異例のスピード出世をとげたのだらうと評価されています。天正9年には近江国長浜に2万5,000石を与えられています。長浜は秀吉が信長から与えられていますけど、今度は秀吉の領地を秀政に与えている。信長から与えられていますが、秀吉にし

てみると自分の後ろに続いてくる人間と感じたかもしれません。

そして、信長の下でかなり活躍していくわけです。ある時、徳川家康が京都に遊びに来て信長が接待をした。そして明智光秀がその接待役であった。ところが、ある事件によって光秀は信長に折檻されるという有名な話があります。俗説ですが、明智光秀が出した魚が腐っていたので、信長は光秀を叩いたという話です。光秀側に立っていうと、鮎寿司は琵琶湖の鮎を樽の中に入れて 1 年間も熟成させた貴重な食べ物であって、気を利かせてご当地名物を出したのに、という感じですよ。ただ、芳醇な香りの鮎寿司は人によって好みがありますが、いずれにしても、光秀はこの事件で折檻されてしまって、接待役が交代します。新たに丹羽長秀と堀秀政が接待役を命じられるわけです。堀秀政は信長に可愛がられていたし、丹羽長秀は実務派官僚で『米五郎左（こめのごろうざ）』と呼ばれ、兵糧米などを調達する能力に非常に長けていた。こういう人は非常に大事なんです、秀吉のころの石田三成がそうです。米の運搬や調達が上手であると、実務派官僚として有能なので可愛がられます。丹羽長秀と堀秀政が接待役を勤めているときに戦が起きます。

当時、秀吉は毛利攻めに行っていたため、遠くにいます。秀政はどちらかと言えば近くにいるわけです。この時に秀政は秀吉方につきます。秀吉側について都の近くいたこともあり、先鋒を命じられる。さてここで、名人久太郎はどんな活躍をしているのでしょうか。

こちらが、山崎の合戦図ですね。京都と大阪の境に山崎という場所があり、サントリーのウイスキー工場もある山崎です。そこで天下分け目の合戦がありまして、明智光秀の 3 日天下が終わってしまったのがこの山崎の合戦です。山崎の合戦の中で秀吉側の軍勢に堀久太郎がいるわけです。この屏風に出てきているぐらいなのでかなりの活躍をしています。天王山に 1500 人余り。重大で大きな戦いや局面を『天王山』と呼ぶのはここからきています。山崎の合戦で明智光秀に打撃を与えた秀吉でしたが、肝心の秀政はどこに行くかというところ、明智の領地に行きます。琵琶湖の周辺に坂本城という城が比叡山に行く入口のところにあります。坂本城を守っていたのが明智光秀の甥で明智秀満という人が主でいました。この城を攻めたのです。坂本城には明智家伝来の宝物があり、例えば来国俊（らいくにとし）の太刀などの名刀や掛け軸などです。来というのは刀づくりの名人のことです。それこそ須坂に深い須田満親（みつちか）の息子の須田長義が大坂冬の陣・鳴野（しぎの）の戦いで活躍しまして、来国俊の刀を拝領しました。それが非常に名刀なわけなのです。今で言う、坂本の宮坂さんの名刀がありますよね、そういうものを拝領したわけです。薬研藤四郎（やげんとうしろう）という脇差も宝物のひとつでした。その坂本城を攻められたときに明智秀満は自害する決意をしているのですが、「明智光秀の宝物は天下の名品であるから、無にするには非常に心苦しいので宝物は敵方に渡す。この宝物は秀政公の家老である直政に譲る」と大音声で告げて城から吊るして下し、光秀の奥さんや子供も皆自害し死んでいったということです。これは『明智軍記』という読み物に書かれていることなので、本当かどうかわかりません。しかし、何が言いたいかと言いますと、堀直政という名前がよく知られていたということなんです。明智秀満、つまり明智家はおなじ美濃国の

人で、堀家とも関係がありました。同郷ということで全然知らない人間ではないわけで、秀政・奥田という人に宝を譲る、それも奥田直政に譲る、とっているんですね。ちなみにこの時はまだ奥田です、奥田直政。

さてこの『天下分け目の天王寺・山崎の戦い』の結果、明智が破れまして秀吉が天下を取ったということになり、今後どうするかという有名な清州会議が開かれます。ただこの段階では天下を取っていたのは織田信長ですから、まだ織田の天下であってその家督を継ぐ者を立てるのが建前ではありました。ところが、信長の長男の織田信忠は本能寺の変で自刃しています。信長の出来の悪い次男と三男、それを家康と柴田勝家が後押しをして、後継者の地位を主張し譲らなかったため、開かれた会議でした。秀吉は家康や柴田勝家の意見に対抗し、そうではない、織田家の家督を譲られたのは信忠であるからその嫡孫である三法師どのが嫡男として織田家を継いでいただかなければならないと主張しました。柴田勝家、徳川家康はもちろん反対意見でした。しかし秀吉は常に手回しが良くて、すでに裏工作をしてありました。三法師を玩具で手なづけて懐くよう仕向けたんですね。その結果、年端もいかない幼児でしたが、三法師が織田家の家督を相続することになるのです。秀吉はさらに手回しがよくお守役を自分の家臣から出すわけです。ここで、実務派官僚である秀政が三法師の傅役（でんやく）つまりお守役を受けます。ここで、秀政の立ち位置がはっきりする。秀吉の意を受けた実務家官僚としての位置付けがそのまま継続したわけです。しかもその時の勲功、山崎の戦いや坂本城攻めでの功績などもプラスされ、さらに出世し20万石の大名・佐和山城主となります。佐和山城は石田三成がその後城主となることで有名です。その前は、堀秀政が拝領していたということです。

さて、信長が亡くなってしまったのですが、秀政の家臣団がどんな構成だったかということをお話したいと思います。【資料3】の信長の書状を見ていただくとわかるのですが、軍勢を出す際に命令を下された者の名前がここに書かれています。要するにこの人たちは秀政の家臣です。宛名の中で最後に堀久太郎の名前が出てきています。堀久太郎宛の手紙なんですね。例えば『飯尾隠岐守 奥田城主飯尾信宗』は、あの奥田城主です。ほかは丹羽長秀・猪子兵助・堀久太郎と出てきていて同グループです。どういう人たちかという点、皆、尾張・美濃の人たちです。堀秀政の家臣は、尾張・美濃の人たちで固めていたということがわかります。次の【資料4】ですが、この文書の中で真ん中にある名前は、この中で一番の殿様なんですね、ここに堀秀政の名前が出ています。左右にあるのが家臣たちの名前です。その中に堀直政の名前が出てきています、堀監物と書いてあります、200人。全体が1000人の陣の中で堀直政は200人、本体の5分の1の兵を率いていたのが堀直政であったということがわかります。

問題はその後、起きます。堀秀政が佐和山城の城主となった、その年に賤ヶ岳の戦いが起こります。先ほどの清州会議で跡継ぎをどうするかという問題が起きて一番対立したのが柴田勝家と秀吉でした。堀秀政は北陸の北ノ庄城を攻め滅ぼした結果、秀政は褒められて北ノ庄を勝家の代わり治めることとなり、30万石になりました。現在のお城は模型で、本

物の北ノ庄城はこの戦いで焼失しています。秀政は、佐和山城城主となってから一年後に30万石になったということになります。異例の大出世ですね。奥田の一族と直政もちろん一緒に北ノ庄に行きます。そして我が須坂藩藩主である直重公が生まれるのです。天正12年生まれ初の初代須坂藩藩主は北陸出身、ということになります。

秀吉ではなくて敵方の家康がこの頃から秀政の動きや働きを虎視眈々と見ています。「はた又、久太郎（秀政）方砦へ、柴田取りかかり候のところ、すなはち合戦に及び、切り崩され、あまた討捕られ候えば、定めて比類なき儀、心地よく候、云々」（秀政の砦への攻撃、秀政の軍勢に景勝が攻めかかったところ両者合戦に及んだ。久太郎が景勝を切り崩した上、あまた討ち取ったとはこれまで類のない戦法であり、大変心地いいですね、秀吉様。）秀吉が言うならともかく、家康が敵方である秀吉の家臣・秀政を褒めていてこんな内容の手紙を出している、異例の出来事です。

秀政と直政は切っても切れない関係でして、非常に縁が深い。数多くあるエピソードの中にこんな話があります。鹿児島征伐に行く途中での出来事です。秀政の家臣で山下甚五兵衛という人がいたのですが、乱心をしていきなり秀政のところを切りかかろうとした。秀政は一番前にいてその後ろに山下氏、はるか後ろに直政が控えていた。まさに秀政に山下氏が切りかかろうとしたときに直政が山下氏を切りつけた、と同時に秀政も山下氏に切りかかったという。相打ちではるか後ろにいた直政と秀政は山下氏を同時に切りつけたという話である。後日、直政に仲間が問うてみた、「日が暮れて薄暗いため見えづかったのと、突発的に起きた事件で私たちはとっさに動けなかった。にもかかわらず、一番後ろにいたあなたはすぐに気が付いて切り付けた。これは、不思議だし、事前に何か知っていたのではないかと。直政は笑って「今まで誰にも教えていなかったことであるが、お前には教えてやろう。殿様といるときには前にいても後ろにいても、どんな時でもいかなる場合でも殿様を見ていなければならない。仮にもわき見はしてはいけない。始終殿様に注意しなければならない。それが武士の道なのだ。そうであるからして、殿様の状態は針がさすほどの小さな出来事でも察知でき、だから突発的な不慮の出来事にも遠くにいたとしても私は知らず知らずのうちに手が出ていただけで、反応することができたのだ。このことを忘れてはいけないよ。」とほかの同僚に論じたという。どれだけ信憑性があるかわかりませんが、江戸時代に流布した話です。ここまでは直政の話です。秀政の話でいきますと、秀政の言い分は少し違います。同時に切り付けた、と主張します。先ほどの話だと直政が先に切り付けたということになっています。秀政は直政とはいとこ同士で気心が知れているので、お前よりおれの方が早かった、ということその場で言ってのけたのです。人を切りつけるんですから、息も切れるわけです。そこで一呼吸置く間もなく「おれの方が早かった」というのだから、それぐらい気位が高いわけですし、直政の方が仮に早かったとしてもそれを制して、自分の方が早かったと先に言ったもの勝ちというところや、いかなる場合でも機転がきくというところに目が行きます。彼らには、最初に手柄を挙げたものが上であるというエピソードがありました。そのことへの念押しであったか判りませんが、

その後直政が何も言えなくなったということです。大名を評価する本の中には、とにかくどんな意味合いであれ即座に明瞭な判断と発言があったことは事実であり、非常に機敏である、そんなところが名人久太郎と言われたゆえんであろうと評価しています。

もうひとつ、九州征伐でこんなエピソードがあります。秀政の軍勢が非常に強くほとんど拍子に城攻めが進んだため、秀政は休む暇がなかった。それぐらい強かったということです。相手の城をどんどん落としていく、快進撃です。秀政は休む暇がないわけです。そこで、捕虜を逃がす時にこう言った「あなた達をもっと城をしっかりと守ってくれるとこちらには非常に楽になる、あと2~3日籠城をがんばってくれたまえ、とお伝えいただきたい。」と余裕綽々の言葉を放って人質を解放したという。さすが名人久太郎だ、ということです。

それから、小田原攻めの時にも逸話があります。この頃、伊豆や駿河などの遠征先で大名たちは兵糧米を運ぶのに非常に苦勞をした。でも秀政は先に行ってあらかじめ馬を用意しておいたのでどんどん運ぶことができ、秀吉が何十万の軍勢を引き連れてやってきたときに褒められた。兵糧米を運ぶのにほかの大名は非常に苦勞した。ですが秀政は先んじて馬を買って準備をしておいたため、どんどんと米の運搬作業をこなすことができた。これも名人久太郎の知恵だ、ということです。

そろそろ、奥田さんの話に入らないといけません。系図を見ていきましょう、直純は直政のお父さんです。美濃国茜部の笹屋敷というところに城があったということです。これは堀秀政と同じ茜部、つまり、直政は秀政の家臣だったということがわかります。直政についてはいろいろエピソードがありますけれど、信長に仕えました。直純の遺領を貰いまして、従兄だったので秀政の兵に属したわけです。伊賀の国の亀甲城を攻めたときに信長から感状を被ります。信長から初めて感状を頂くわけです。永禄12年の時に伊勢国の峰城を攻めたときに山岡道阿弥という忍者の棟梁だったのですが、槍を奪い取った勲功を果たしたと言われています。山岡道阿弥は非常に有名で足利義昭の家臣でした。義昭は信長に引っ張られていたのですが、その後信長と敵対しまして、つまり直政や秀政とも戦ったわけです。そんな有名人である山岡道阿弥の槍を奪ったのが直政だったということです。先ほどの賤ヶ岳の戦いでも勝家から金の御幣の馬駿を奪ったとか、相手の小塚右衛門の首を討ち取ったなどの勲功を挙げています。小塚右衛門は前田利家の家臣ですが、なぜ秀政と戦ったかという、理由があります。前田利家自身は柴田勝家とも仲が良かったのです。同じ北陸隣同士で恩義があった関係から最初は勝家と組んだわけです。ところが前田利家もともと秀吉と友達関係であることを知っていた勝家が「秀吉とは無二の親友であるのだから、俺に気兼ねせずに帰っていいよ」と言われ帰っていくわけです。その途中で秀吉側である秀政の軍勢と会い、その時に小塚は直政に首を取られるわけです。直政はこの時までは奥田直政です。先ほどの柴田勝家攻めで秀政が勲功を挙げまして、北ノ庄の30万石になった。その勲功を称しまして、直政もよい働きをしたということで、「堀」という姓を称してよいという話にここからなるわけです。北ノ庄の時です。ですから、堀直重さんが生まれたときは奥田ではなくて、堀直政の子として生まれているのです。直政はその後、

堀一門集団の中核となっていくんですね。

天正 14 年の秀吉の時に、上杉景勝が越後にいてまだ、秀吉についていなかったのですが、越中の国の佐々成政も秀吉に従わなかった。そこで秀吉は越中を攻めるための兵を挙げます。その辺のところは【資料 5】に載っています。秀政が同じ一族の堀源助に出した手紙です。要は中味は相談事です。上杉景勝が北陸にやってきて佐々成政を攻めるというときにいろんな情報があるが、それを受け取った時にどうすればいいかという質問に対して、堀監物つまり堀直政に相談して物事を進めろと答えています。秀政は直政のことを非常に信頼していたということがよくわかります。そして、景勝を出迎えるときは粗相がないように、直政を同行すること、と書かれています。秀政の家臣としての直政の位置付けは大きいわけです。のちに『名将言行録』というものが幕末に編纂され、その中に秀政と直政のことが出ています。直政のことをどんなふうに書いているかというと、秀吉はこう言ったといいます。「陪臣にて直江山城、小早川左衛門、堀監物杯は天下の仕置きをするとも仕兼間敷者（しかねまじきもの）也とて賞誉せられけり」直江山城は直江兼続、小早川左衛門とは小早川隆景のこと、堀監物は堀直政のことです。陪臣とは、秀吉の直接の家臣は堀秀政でその家臣、又家臣のことを言います。『天下の三陪臣』と呼ばれる直政は、長久手の合戦や小田原の陣でも勲功があったと書かれています。ところが天正 18 年、秀政が小田原の陣に出ましたけれど、秀政が 30 代で若くして死んでしまうんですね。家康に暗殺されたのではないかという説があるくらい、急な死でした。そして、その後どうなったかということ、【資料 6】を見て下さい。秀吉の命令で家督を継いだのが秀政の息子・秀治でまだ幼少の身です。直政は家老としてそれをサポートしていくということになるのですが、資料はその前の小田原攻めの際の堀秀治の家臣の一覧表です。尾張や美濃の時の仲間、それから北陸に移住していたので北陸の仲間が堀家の家臣となっているわけです。まとめてみますと、堀秀政の家臣というのは北陸諸大名が主流で、もう一つは美濃や尾張の武将を統率している。特に信長の側近だった人たちを堀秀政が全部吸収していたということです。秀政は 38 歳で死んでしまいましたが、秀吉はこの死を残念がります。「秀政は傑出の人である。秀吉はこれを深く愛し、小田原の役が終われば関八州を与えんと思われしが惜しいかな、ああ戦に死せり、秀政の死や尊き人も惜しまぬ人ぞなかりける」ということなんですね。「名人久太郎と言うように名づけられて天下を指南し、落ち度あるまじき人なり。まさにこの人のことである」と評したとされています。

秀政の後、秀治が跡目相続しますが、秀治が年少のため直政が後見人となります。【資料 7】は堀秀治の手紙ですが、最後の方には必ず「猶堀監物かたより口上を得るべく候」と書かれています。これはどういうことかということ、手紙を持っていく人がいます。大事なことは書いていません。大事なことを書いてしまうと、捕られたときに大事なことが全部知られてしまうからです。だから、大事なことは手紙を持っていく人が伝えるのです。それを口上と言います。秀治は大事な人に手紙を出すときは、直政にもたせて直政の口から大事なことは聞いてもらうよう手配していました。それぐらい信頼している人に頼むのです。

メインの話になってくるのですが、秀吉が亡くなります。会津に上杉景勝を移封させます。その代り後に入ったのが堀秀治、つまり堀家が越後に入るわけです。なぜ会津に移封させたかという点と近くにおいて行動を見張るとかということがあったと思います。その辺は【資料 8】【資料 9】に書いてあります。景勝を会津に移封して、須坂の戦国武将もけっこう多く越後に行きます。その辺のことは須坂市誌に書いてありますので、ぜひ、お読みください。須坂の戦国時代はここで終わります。堀家が越後に入ったわけです。北信濃は高野直正という秀吉の側近だった人が治めます。これが、移封した時の秀吉の命令状です。だれがどこに行ったのかということがでております。春日山城に堀秀治がトップでいます。三条城に堀直政が入って、坂戸城に直政の次男・直寄、つまり堀一族が越後 45 万石を治めたということです。堀秀治が 45 万石のお殿様なんですけど、実際、秀治が直轄地として持っていたのは 4 万石です。たった 4 万石で、ほかには自分たちの家臣に治めさせていますので、直臣が 41 万石ありまして、堀直政は 5 万石です。要するに越後の国は 45 万石なんだけれど、堀秀治が 45 万石ではなくて直臣集団が分けている、つまり分担して堀一族が越後を治めていたというのが真相です。

関ヶ原の合戦になるのですが、この時に徳川方につくのか、豊臣側である石田三成方につくのか、堀秀治は悩むわけです。そこで、話し合いをさせます。直政の次男直寄、本当は実質的に 3 男ですが、こう言います。「我々は太閤様にお仕えしていた石田方につくべきであろう、すなわち上杉景勝と一緒に戦うべきだ」と。石田三成に付こうと言ったわけです。ところが、父親である直政は違う意見なんですね、「太閤様の御恩は忘れるべきではない、自分も若いときから仕えている。だけど、もともと太閤様は信長の家臣であるから、信長公の家臣であったということを忘れてはいけません。大公様の御恩だけだとは言いがたい。」という話をして堀家の意見は上杉ではなく徳川方につくということになります。ここが有名なところになります。

秀吉が亡くなって、慶長 5 年、関ヶ原の合戦が起こります。上杉景勝と石田三成がはさみ打ちをしようという話になったのです。景勝は関東地方の城を押さえるために家康をけん制するために新しい城を作ったり、国境の道に関所を作って出入を厳しくしたり、また、越後に残してきたもともと上杉の家臣だった地侍をそそのかして堀家を混乱させるように先導するわけです。これを越後遺民一揆といいます。このようなことをされて、堀家の人たちは鎮圧するのに非常に苦労したといいます。そこで堀直政はどうしたかという点、かくかくしかじか家康さま、会津の上杉景勝に謀反の兆しがある、なぜかという点と城を作ったり道を作ったり関所を作ったり、というようなことを家康に逐一注進するのが直政なんですね。それに対して家康は本当かと、ならば景勝に問いただそうではないかということで、家康は景勝に書状を送った。そしてそれを受け取った景勝は家臣の直江山城守・直江兼続を通して反論をします。その反論を書いたものがいわゆる直江状と呼ばれる書状である。これが非常に面白いものなのですが、これが奥田系図の中にも出てきまして、要するに越後と会津の境の村で起きた一揆をおこしたのが景勝であった、と家康に注進したわけ

ですね。それが【資料 12】にある有名な直江状なんですね。昨年大河ドラマの中でこの「直江状」を読むシーンがあります。ここに堀監物の名が出てきます、讒者（ざんじゃ）と言っていますが、家康に言讒言した、要するに堀監物が告げ口したが、それを信じるのか信じないのかは家康公にかかっているという内容で、堀監物は悪者の扱いで出てきます。この話は、どんどんどんどんヒートアップして行って家康を挑発し、怒らせてしまいます。そしてどこまで事実かはわからないのですが、少なくともその情報を家康と直政の間でやり取りがされていたということはよくわかるわけです。家康は直政の働きを非常に買っておりまして、これは7月26日ですから、関ヶ原の合戦は9月です。その間2か月くらいの間ですけれど、家康は会津征伐を行い、いよいよ上杉景勝に仕置きをなさいと堀監物に言います。上杉を食い止めて下さいという意味ですね。そうでなければ家康は関東から京都に行く際に後ろから責められるのですから。というように命令している。

【資料 11】は家康が直接直政に手紙を書いたものです。新潟と会津の境目に景勝が出入りしていて一揆を催していると、非常に悔しいことであるけれどもお前がことごとく討ち取ったということは非常に立派である、というように直政の働きを褒めている。この手紙の日付は9月21日ですから、関ヶ原は9月15日で終わっています。つまり、関ヶ原の合戦後、直政に「お前の働きがよかったのだ」と直接褒めている、ということがわかります。

いよいよ直重さんが出てくるんですけど、慶長5年に関ヶ原の戦いで東軍が勝利しまして、堀秀治の所領安堵となり、その中に家康がこう言ったとあるんですね、秀治は幼少の身であったから、実質的には直政の力が大きかった。「今般越後凶賊急ぎ国中を伏誅速やかに平らげて均すはもっぱら直政の軍功にあり、直政志を深くし節義を守る」、家康曰く「越後一国を直政に賜う而してこれを賞すと雖もなお不足たり」と、直政を高く評価しています。この後の話ですが、また上杉の残党が一揆を起こしますが、これを直政が鎮圧します。慶長4年には秀吉の奥さんであるねね（高大院）が秀吉の菩提寺を作りたい、と言った時に直政は寺を建設しています。もみじで有名な高台寺ですけれども、あの高台寺を作った奉行が直政でして費用の半分は直政が持ちました。高台寺にとって直政はお寺の開基という位置づけがなされています。慶長10年には家康の息子である徳川秀忠の養女になった本多忠政の娘と秀治の長男・忠俊が結婚します。つまり徳川家とは遠戚となります。そして満を期して直江津に福島城を作っていくわけです。高台寺で一番大切な開山堂というお堂に直政の木造が安置されています。どうして秀吉の菩提寺である高台寺を徳川方であった堀直政が尽力したのかというと、本当は本人に聞かないとわからないのですが、奥田氏のルーツをたどっていくと、秀吉と同様に尾張の出身であるということ、信長時代からの大名であったこと、秀政とともに秀吉の家臣であったということで、浅からず因縁がありますし、ひょっとしたら同郷であるねねとの近しい関係もあったかもしれません。福島城を直江津に作るのですが、これが結局、改易になりまして堀家がずっとそこにいることはなかったんですね。

堀家が、慶長13年、直政が亡くなる直前です、越後の国45万石のうち3万8000石分が

余っていて、それで以下の人物に分与し、新しい藩を作りたいと直政が幕府に願い出ます。直政にしてみたら自分の子供や親族に対して、藩を分け与えることで堀家の力を広めたいという思いがあった。その内、堀直重に 3000 石を与える、ということになりました。これが聞き入れられまして直政が亡くなった後、直重が治めていました。ところがここで兄弟げんかが起こってしまいます。直政が死んだ後、長男と三男の直寄がけんかをするわけです。いろいろ仲が悪かったんですね。その仲裁をする際に当時の堀の本家、越後 45 万石を堀忠俊が跡を継ぐわけですが、この忠俊に対して長男の直次は讒言（ざんげん）を言います。監物を使っているので長男・直次は直政の直系ですね。直寄を追放しようと話をします。ところが直寄は当時大御所様に近い関係で駿府城にいたんですね。ですから近くにいる家康や秀忠にこちらはこちらで讒言（ざんげん）をいうわけですね。結果、直次がいけないという決定になりました。しかも徳川家は大名の数を減らそうとしていた時期だったので、これは大名を潰すのにいい機会だということで、この忠俊というのは家中を取り締まるには不足である・向いていないということで越後 45 万石を解任されてしまいます。その後、越後には有名な松平忠輝が入ります。直政の長男直次も 5 万石であったのに出羽国の最上義光という人に預けられます。最上義光というのは奥田氏と同じで、元々斯波氏であるから、同族の斯波氏のもとに奥田直次は島流しになったというのは、偶然ではありません。同じ一族で同じ一族が面倒を見るということになります。讒言（ざんげん）をした堀直寄は 5 万石から 4 万石に減らされますが、存続します。小布施や下高井・下水内あたりの領主になったんですね。

堀直寄ですがこの後、非常に堀家の中で出世していきます。駿府城の火災を鎮火したり、大坂冬の陣で活躍したりします。家康が死ぬ際には、徳川家に謀反を企てる者がいたら、一番は藤堂高虎、2 番目は井伊尚昌の子供直勝に任せよ、堀直寄はこれら 2 人の話に横やりを入れるべし、という言葉を残します。ここで言う横やりは相手の邪魔をするという意味ではなく、助けろという意味です。家康はこの三人に徳川家を託すという風に思っていたのだということです。長岡城 8 万石、村上城 10 万石になったのは直寄の功ということです。皆さんよく知っている上野の寛永寺ですが、この寛永寺というのはもともと堀直寄の土地だったんです。寛永寺自体は違うのですが、ここに凌雲院という建物があって、今はもうないのですが、それを作ったのが直寄です。62 歳で亡くなり、凌雲院に祀られます。上野の今はないのですが、西洋美術館は堀家の所有地に建てられていました。ちょっと裏山を登りますと上野大仏というのがあります。これも、もともと堀直寄がこの大仏を作っています。これは大正時代の写真です。関東大震災で焼けおちまして、首だけ落ちた。だから今現在上野の山に行きますと、丹後守であった直寄にちなんで丹後大仏として親しまれておりまして 受験生に人気です。どうしてかということ落ちてしまったが首だけが残ったことから、「これ以上、下に落ちない！」という意味で・・・(笑) 受験の神様になっています。ほかに直寄は駒込の丹後仏も直寄が作っていますし、もっと言うと不忍池も堀家のものでした。ということで、上野というのは堀家なんです。直重自身は北ノ庄で生まれてい

ますけど、父親である直政の遺言によって 3000 石を与えられます。慶長 15 年に高井郡が追加されまして、また 8000 石与えられます。ここに須坂藩が入るわけですね。大坂冬の陣のあった慶長 19 年の時に、土井利勝の元で勲功を挙げるわけです。ここで 12,050 石を賜った。これが大坂夏の陣の結果で、いまの須坂藩となります。というものの、堀家のこの方は実は須坂に来ていません。本拠地は下総国で今の千葉県に住んでいて、祀られているのは新福寺というお寺です。肖像画は宗勝寺が所蔵しています。遺領として子供たちである直升に 10,050 石、直昭に 1,000 石に分割します。香取郡の各 500 石は断絶しますが。

堀家というのは江戸時代を通じて残った家ですけれども、特に村松・須坂・椎名の堀家は直政系で変わらずずっとその場所に残った家になります。秀政系では幕末まで残った飯田藩の堀家がありますが、いずれにしても潰れることがなく室町時代の同じ斯波氏にルーツが辿れる藩がいくつかあり、そのうちのひとつが須坂であったということになります。長い間お聞きいただきました。ちょっとしゃべりすぎてしまいまして、延長してしまいました。これを機会に直虎だけでなくぜひ、直政・直重、その辺にまで目を向けていただくといいかなと思います。本日はご清聴ありがとうございました。